TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 532語

Clytie

クリュティエ

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 海のそこにすむ水のようせいクリュティエは、水の上にかがやくふしぎな光にあこがれます。毎日その光を見つめているうちに……。

Clytie was a beautiful little water nymph who lived in a cave at the bottom of the sea. The walls of the cave were covered with pearls and shells. The floor was made of sand as white as snow.

There were many chairs of amber with soft mossy cushions. On each side of the cave-opening was a great forest of coral. Back of the cave were Clytie's gardens.

Here were the sea anemones, starfish and all kinds of seaweed.

In the garden grotto were her horses. These were the gentlest goldfish and turtles.

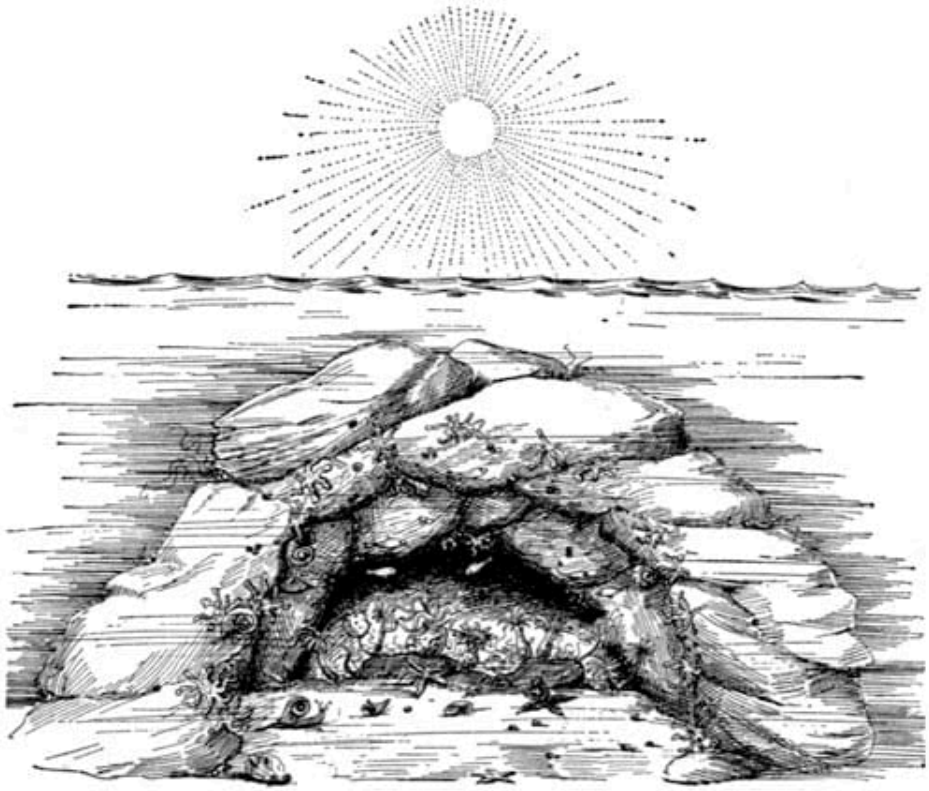
The ocean fairies loved Clytie and wove her dresses of softest green sea lace.

With all these treasures Clytie should have been happy, but she was not. She had once heard a mermaid sing of a glorious light which shone on the top of the water.

She could think of nothing else, but longed day and night to know more of the wonderful light.

No ocean fairy dared take her to it, and she was afraid to go alone.

One day she was taking her usual ride in her shell carriage. The water was warm and the turtles went so slowly that Clytie soon fell asleep. On and on they went, straight towards the light, until they came to an island.



As the waves dashed the carriage against the shore Clytie awoke. She climbed out of the shell and sat down upon a large rock. She had never seen the trees and flowers.

She had never heard the birds chirping or the forest winds sighing.

She had never known the perfume of the flowers or seen the dew on the grass.

In wonder, she saw a little boy and girl near her and heard them say, “Here it comes! Here it comes!”

As she looked away in the east she saw the glorious light that she had so longed for. In its midst, in a golden chariot, sat a wonderful king.

The king smiled and instantly the birds began to sing, the plants unfolded their buds, and even the old sea looked happy.

Clytie sat on the rock all day long and wished that she might be like the great kind king.

She wept when he entered the land of the sunset and she could see him no longer. She went home, but she could scarcely wait until the morning. Very early the next

day her swiftest goldfish carried her to the rock.

After this, she came every day, wishing more and more to be like the great kind king. One evening as she was ready to go home, she found that she could not move her feet. She leaned out over the sea and knew that she had her wish. Instead of a water nymph a beautiful sunflower looked back at her from the water.

Her yellow hair had become golden petals, her green lace dress had turned into leaves and stems, and her little feet had become roots which fastened her to the ground.

The good king the next day sent her into many countries, into dry and sandy places, that the people might be made happy by looking at her bright face, so like his own.



和訳 クリュティエ（Clytie）

クリュティエは、海のそこのほらあなにすむ、美しい小さな水のようせいでした。ほらあなのかべは、しんじゅと貝がらでおおわれていました。ゆかは、雪のように白いすなでできていました。

こはくでできたいすがたくさんあって、コケのようなやわらかいクッションがのっていました。ほらあなの入り口の両がわには、サンゴの大きな森がありました。ほらあなのうしろには、クリュティエの庭がありました。

そこにはイソギンチャクやヒトデ、いろいろな海そうがありました。

庭の小さなほらあなには、クリュティエの馬たちがいました。それは、とてもおとなしい金魚とカメたちでした。

海のようせいたちはクリュティエが大すきで、いちばんやわらかい緑色の海のレースで、ドレスをおってあげました。

こんなにたくさんのたからものがあるのですから、クリュティエはしあわせなはずでした。でも、そうではありませんでした。クリュティエは前に、人魚が歌うのを聞いたことがありました。水の上でかがやく、すばらしい光の歌でした。

クリュティエはもうほかのことは何も考えられず、そのふしぎな光のことをもっと知りたいと、昼も夜もねがっていました。

海のようせいたちはだれも、こわがってクリュティエをそこへつれていこうとはしませんでした。クリュティエも、ひとりで行くのはこわかったのです。

ある日、クリュティエはいつものように、貝がらの車に乗って出かけていました。水があたたかく、カメたちがとてもゆっくり進むので、クリュティエはすぐにねむってしまいました。カメたちはどんどん進み、光のほうへまっすぐ向かって、とうとうある島に着きました。

波が車を岸にぶつけたので、クリュティエは目をさましました。クリュティエは貝がらからはい出して、大きな岩の上にすわりました。クリュティエは、木や花を見たことがありませんでした。

鳥のさえずりも、森の風のため息のような音も、聞いたことがありませんでした。

花のかおりも知らず、草の上のつゆも見たことがありませんでした。

びっくりしていると、近くに小さな男の子と女の子がいて、こう言うのが聞こえました。「ほら、来るよ！ほら、来るよ！」

東のほうを遠く見ると、ずっと会いたかった、あのすばらしい光が見えました。そのまん中には、金の車に、すばらしい王さまがすわっていました。

王さまがほほえむと、たちまち鳥たちが歌いはじめ、草や木はつぼみを開き、年をとった海までうれしそうに見えました。

クリュティエは一日じゅう岩の上にすわって、あのすばらしくてやさしい王さまのようになれたらいいのにと思いました。

王さまが夕日の国へ入っていき、もう見えなくなると、クリュティエはなきました。クリュティエは家に帰りましたが、朝が来るのが待ちきれないほどでした。次の日、とても早く、いちばん足の速い金魚が、クリュティエを岩までつれていきました。

それからクリュティエは毎日やって来て、あのすばらしくてやさしい王さまのようになりたいと、ますます強く思うようになりました。ある夕方、帰ろうとしたとき、クリュティエは足が動かないことに気がつきました。海の上に身を乗り出してみて、ねがいがかなったことがわかりました。水にうつっていたのは、水のようせいではなく、美しいヒマワリでした。

黄色いかみの毛は金色の花びらに、緑のレースのドレスは葉とくきに、小さな足は根になって、クリュティエを地面にしっかりとつなぎとめていました。

次の日、やさしい王さまは、クリュティエをたくさんの国へ、かわいた、すなの多い土地へも送りました。王さまにそっくりな明るい顔を見て、人々がしあわせになるようにと。

たんご と クイズ クリュティエ

cave ほらあな	**shells** 貝がら	**starfish** ヒトデ
turtles カメ	**mermaid** 人魚	**island** 島
sunflower ヒマワリ	**roots** 根	

Q1 **クリュティエの「馬」は、本当は何だった？**

① イルカとクジラ　② 金魚とカメ　③ カニとエビ

Q2 **金の車に乗った王さまがほほえむと、どうなった？**

① 鳥が歌い、つぼみが開いた　② 雨がふり出した　③ 海があれた

Q3 **クリュティエはさいごに何になった？**

① バラ　② チューリップ　③ ヒマワリ

こたえ

Q1 ② クリュティエの馬は、とてもおとなしい金魚とカメたちでした。貝がらの車を引いていたのです。

Q2 ① 王さまがほほえむと、鳥が歌いはじめ、草や木がつぼみを開き、海までうれしそうに見えました。

Q3 ③ 水にうつっていたのは美しいヒマワリでした。かみは花びらに、ドレスは葉とくきに、足は根になったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。